

中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響
—形態、頻度、タイミングを中心に—

楊 晶

要 旨

中国人学習者の日本語における会話を観察すると、相づちの使用に関して、何となく不自然と思われる場面が少なくない。その不自然さの原因には、母語の影響によるものもあると考えられる。そこで、設定された同一場面で1対1で行なわれる会話の音声・録画資料（①中国人日本語学習者の母語による会話、②日本語母語話者の母語による会話、③学習者の日本語による会話）をデータとして、そこに現われた聞き手の相づちについて、【形態】【頻度】【タイミング】の観点から分析を行なった。三者の相違点を明らかにした上で、学習者の日本語の相づち使用について、母語と目標言語の日本語との関係でどのように位置づけられるか考察を試みた。その結果、「ア系」「ウン系」「エ系」の感声的表現、「くり返し」、「うなずき」の使用傾向や、頻度及び「終止形」「て形」「格助詞」に呼応する相づちの使用率などにおいて、母語の中国語の影響を受けていることが分かった。

[キーワード] 感声的表現 くり返し うなずき 母語からの影響
円滑化行動

1. 研究の目的

日本人は会話の中で相手の話に相づちを頻繁に入れながら聞く。小宮(1986:43)によれば、「話し手は、聞き手の巧みな相づちにより、話を続ける意欲を得る」とされている。相づちは日本語の会話を円滑に進める上で必要不可欠な要素と言ってもよいであろう。

相づちは日本語の会話の進行上重要な役割を果たしているが、日本語学習者によるその習得は決して容易なものではなかろう。外国人学習者は長年日本語を勉強し、語彙や文法の面ではほとんど申し分のない日本語を話せても、必ずしも相づちがうまく使いこなせるとは限らない。

中国人留学生の日本語における会話を観察すると、相づちが少なかったり、タイミングを誤ったり、不適切な相づちを使ったりする場面が時々目

につく。相づちが不自然である原因はいったいどこにあるのか非常に興味深い。いろいろな要素が作用しているであろうが、母語からの影響によるものもあると考えられよう。

中国語にも日本語の相づちに共通した性格を持つものがある。しかしながら、聞き手の反応という視点から記述・分析するような実証的研究は皆無に等しく、相づちとして定義されるものはない。また日本においても、中国人学習者に絞って、彼らの日本語における相づち使用の実態調査や、中国語と日本語の相づちについての対照研究は未だ少ない。筆者の知る限りでは、劉建華(1987)と水野(1988)の二編である。更に、非言語行動の相づち(身ぶりの相づち)表現も、会話において大変重要な役割を果たしていることは既に指摘されてはいるものの、それについての調査や研究はあまり見られない。

そこで本研究では中国人学習者(留学生)の同一場面における中国語と日本語による会話を収録し、そこにおける両言語の相づちの使用実態を明らかにした上で、そのデータを日本語母語話者のものと比較することにした。それによって、学習者の中国語における相づち使用が日本語会話における相づち使用にどのような影響を及ぼしているかを、うなずきなどの非言語的表現も含めて考察した。

2. 研究の概要

2.1. 被験者

被験者は全員お茶の水女子大学の学生である。うち、中国語母語話者(学習者)は12名、日本語母語話者は6名であった(被験者の個人データのリストは本稿末の資料を参照)。

2.2. 調査の方法

メイナード(1993:62-65)によれば、「日常会話分析、特に対照分析を目的とする場合に一番望ましいデータ」は、「研究者または関係者は参加せず、ある一定の決められた状況で集めた会話」とされている。この指摘を参考にし、中国語も日本語も、語学クラスの情報を得るために、被験者が直接学校に行って、事務員に情報をもらう場面を設定し、そこで行なう会話を分析用データとした。

話し手の話し方や聞き手との関係など、話し手側の状況が相づちに影響

を与える要素になると思われるので、両言語における事務員役の話し手を中国人と日本人各一名（女性）に固定し、データを安定したものを目指すことを目指した。話し手役の二人は、共に被験者と初対面の関係であり、年齢は聞き手役の被験者より上である。

調査は以下の手順に従って行なった。

調査の本来の目的は事前に知らせずに、「中国人と日本人の言語行動の特徴を比較するために会話の場면을収録する」ということだけを被験者に前もって断わっておいた。そして、調査実施当日、設定した場面についての説明と聞く内容が書かれた紙を配り、クラスの開設期間、授業の時間帯や費用、先生と生徒の状況、在留資格を取るための手続きなどについて聞くようにと明確な指示を与えた。

中国人被験者の場合、中国語及び日本語で二度調査を行なう。そこで、二回目の調査は時間的にずらす工夫をした。

上述の方法でデータを収集することにし、合わせて以下のような30組の会話をビデオ及びオーディオテープで録画・録音した。

- ①中国人学習者が中国人の話し手と母語で1対1で行なった会話（以下、C Cと略称する）12組、約80分。
- ②日本語母語話者同士が1対1で行なった会話（以下、J Jと略称する）6組、約60分
- ③中国人学習者が日本人の話し手と日本語で1対1で行った会話（以下、C Jと略称する）12組、約135分。

会話収録後、被験者の相づちに関する意識について内省させるため、その場でフォローアップ・インタビューを行なった。その後、更に「相づちに関する意識調査」という質問紙によるアンケート調査を実施した。また、被験者の個人的背景についても調べた。

2.3. 分析の観点

C J、J J、C Cという三つのデータを比較することを通して、三者の相違点を明らかにした。特にC Jに見られる相づち使用がC C、J Jとの関係でどのように位置づけられるのかを、【形態】【頻度】【タイミング】の三点から分析し、考察を行なった。

3. 調査結果の分析と考察

【形態】

聞き手の相づちを先ず「相づち詞」「くり返し」「言い換え」「先取り」「その他」「うなずき」に大別した。

「相づち詞」については、小宮(1986:48-51)の分類法にしたがって、「はい」「ええ」「ああ」「うん」のような、それによって概念を持たず、それ自体で直接話す人の感情を表すものを<感声的表現>、また「なるほど」「そうですか」のような、現在感動詞的にも使われる言語形式を<概念的表現>とに分ける。さらに、<感声的表現>については、「ハ系」「エ系」「ア系」「ウン系」に細分した。

ここで言う「うなずき」は、言語形式なしで単独で使用されるものと言語的相づちに伴って使われるものとは指すが、それぞれに分けて考察した。うなずきが起きるごとに1回として数えた。ただし、連続して現われた場合は、その実際の出現回数は考慮せずに、すべて1回分として数えた。

(1) 「ウン系」「ア系」の多用

感声的表現の相づち詞に関しては、CJはJJと比べて、「ア系」の使用割合がやや高い。そしてフォーマルな会話場面にもかわららず、「ウン系」の多用が著しい(図1参照)。

CCにおいても、日本語の「ウン」や「ア」

と似た発音をしている“嗯[n, ng]”と“啊[a]”が主な相づち詞として使われている。各々「聞いている」、「理解している」、「興味を持っている」という機能を持っているが、日本語の相づち詞と異なり、待遇的な意味が含まれていないため、どんな場面でも使用できる。

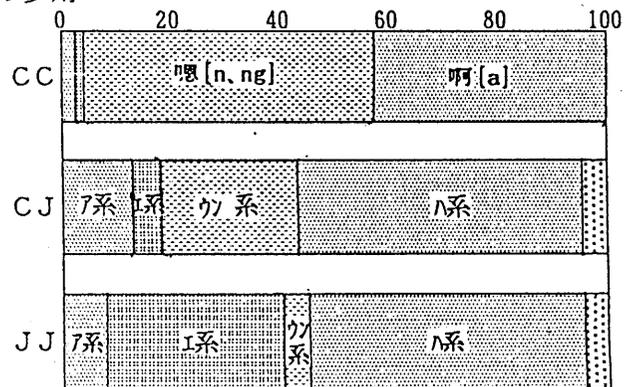


図1. 感声的表現の系別使用割合 (言語別)

したがって、CJに見られる「ウン系」「ア系」の多用には母語の影響があると見るのが妥当であろう。

(2) 「エ系」を使用しない傾向

CCにおいては、日本語の「エー」に近い中国語の“歎[e]”は、相づち詞としてはほとんど使われていない。中国語の“歎”という感嘆詞は、日本語の「ええ」と異なり、普通は応答詞として答える時に使われるものである。CJにおいても、12名のうち、9名がまったく、あるいはほとんど「エー」を使っていない。

図1に示されるように、CJの一般的傾向としてCC同様「エー」があまり見られないと言えるだろう。フォローアップインタビューでこの指摘をしたところ、多くの被験者は、「日本人がよく「ええ」を使うことには気がつかなかった」と答え、気が付いた一部の人々は、「「ええ」は（中国語ではあまり使われないので）発音しにくい」と答えている。

(3) 「くり返し」の多用

図2を見ると、CJにおいてJJより「くり返し」が多く使用されていることが分かる。

水野（1988:21）は、中国人の会話場面を観察し、中国人の会話における「おうむ返し」を相づちの主な表現として捉えている。今回のCCにおいても、「くり返し」の回数がCJ、JJより多く観察されている（図2参照）。相手の話を熱心に聞いているという態度、あるいは自分が関心を持つ部分や重要だと思うところを「くり返し」によって話し手に表わしていると言えよう。

今回のCCとCJにおける「くり返し」の個人別使用割合を調べると、CCで「くり返し」を多く使用している人はCJでも同様の傾向が観察され、日本語のレベルや学習時間との相関関係は見られない。したがって、CJにおいてJJより「くり返し」が多く使用されているのは母語の影響

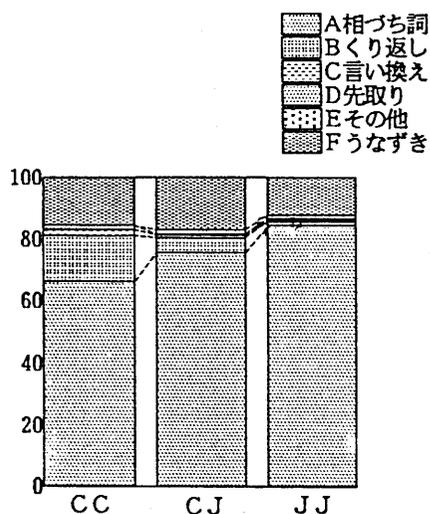


図2. 相づちの形式別使用割合

によるものであると考えられよう。

(4) うなずきの多用

非言語的相づちのうなずきの使用状況は図3が示している。言語形式を伴わない「うなずき」が、相づち総数及び相づち的なうなずきの総数に占める割合に関しては、CJはJJだけでなく、CCよりもやや高い。つまり、CCは、非言語的表現のうなずきを単独で使うことを好む傾向があり、CJにおいてそれがさらに強く現われてきている。

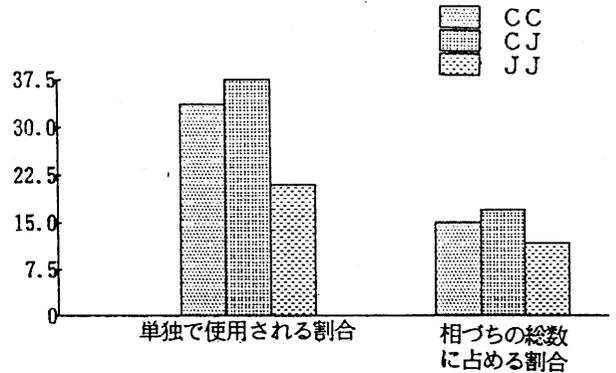


図3.うなずきの使用割合（言語別）

CCで見られるうなずきの使用傾向について、先行文献と意識調査の結果に基づいて検討した。中国語会話においては、一般的に非言語行動をより重視し、言語形式を伴わないうなずきや視線などで話し手に対する尊敬の気持ちや話の内容への注意と理解を表わすことを比較的好む傾向があることが指摘されている。

そこで、CJにおけるうなずきの使用は、外国語におけるコミュニケーションにも、母語の習慣がさらに強められた形で持ち込まれているものと解釈できよう。このような現象について、岡崎(1995:108)は、韓国人日本語学習者による「断り」場面での日韓対照から、「学習者が主体的に受入れ側の話者との友好的対人関係を作りだしていくための円滑化行動」として韓国人学習者の日本語における「断わり」を位置づけている。ここで観察されたCJの行動も「円滑化行動」の現れと考えられよう。

【頻度】

日本語の相づちの頻度の算出法は、研究者によって様々である。本研究に用いられる会話資料について言えば、話し手が同一人物であり、トピックも同じであるため、場面や話し手の要因が頻度に影響する可能性は排除できよう。そこで会話の中から被験者が聞き手に回っている部分だけを取

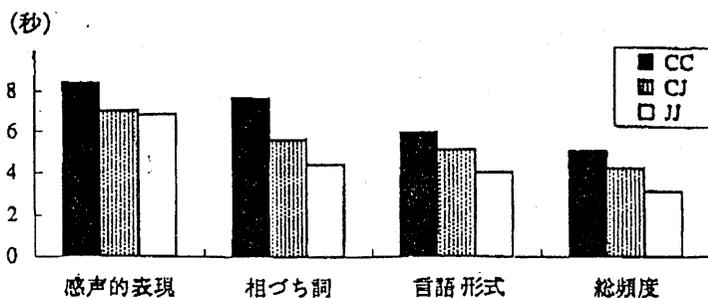


図4.形式別相づちの頻度（言語別）

り出して、その時間（話し手の総発話時間）を聞き手の打った相づちの回数で割り、相づちと相づちの間の平均時間で頻度を出した。

相づちの各形式の頻度の結果は図4で示されている。「言語形式」の頻度とは、言語的相づちの使用頻度のことであり、「総頻度」とは、言語的相づちと、言語形式なしで単独で使用されるうなずきを合わせて算出した相づちの頻度である。

どの形式においても、JJに比べ、CCでは、相づちと相づち間の時間は2秒以上長い。日本語では、「ね」「けれど」「て」「ので」の後に相づちが入ることが多い。それに対して、中国語には、このようなはっきりした相づちを入れるコンテクストがない。また、日本語母語話者同士の会話では、話し手側が聞き手に「求める」、または聞き手側には「入れよう」とする意識があると先行研究で述べられている（注）。しかし、「相づちに関する意識調査」やフォローアップインタビューによれば、中国語母語話者はこのような意識がさほど強くないようである。これは、同じく日本語による会話でありながら、CJの頻度がCCより高いものの、JJより低い理由と考えられよう。

【タイミング】

日本語の相づちの適切なタイミングには、話し手の発話形式による統語的なものと、発話のイントネーションによる音声的なものがある。ここでは統語的な要因だけを分析することにする。

CJとJJについて、まず会話の中で相づちが打たれたところを文法項目別に分類した。更に、同じ形式のところに入れられた相づちの回数を数

え、その回数が言語的相づちの総数に占める割合を調べた。その結果、C JはJ J同様、終止形、終助詞／間投助詞、接続助詞、名詞、格助詞などの文法形式に現われている言語的相づちが、相づちの総数に占める割合が高いことが分かった。

しかし、さらに各形式の割合を見ると両者の違いが出てくる。比較的顕著な違いを取り上げると、J Jに比べてC Jでは「て形」と「格助詞」の後に入れられた相づちの割合がかなり低く、一方、「終止形」の方はあまり変わらない。

そこで、上述の3つの形式について、各会話文にある同じ属性のもの（出現数）を調べ、その場所に入れられた相づちの回数（使用数）がその文法形式の総数に占める割合を相づちの「呼応率」として求めた。その結果は図5の通りである。

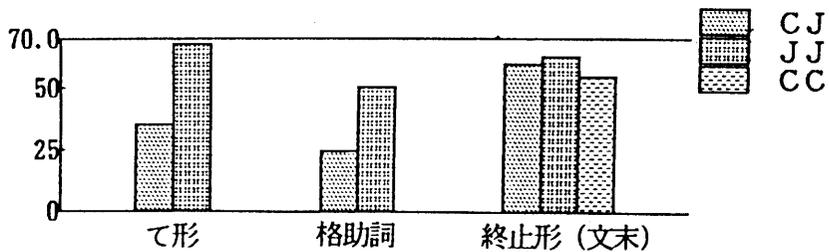


図5. 「て形」「格助詞」「終止形 (文末)」に呼応する相づち率

図5から「終止形 (文末)」に対する相づちの呼応率に関しては、三者には大差がなく、(中国語にはない)「て形」と「格助詞」に関しては、J Jの方がそれぞれC Jの倍以上の呼応率で相づちを入れることが分かる。つまり、C Jにおける「終止形」に呼応する相づち率が高いのは、中国語(C C)の、文末に相づちを打つという特徴をそのまま保持していると言えよう。C Jにおいて、「格助詞」に対する相づちの呼応率が低い原因の一つは、中国語にそのような構文上の要素がないことに求められるのではなかろうか。「て形」の後に相づちを打つことが少ないのは、接続助詞「て」が用言の連用形についた時、それを文末ではなく、文の途中としか認知できないと考えられる。

4. まとめ

CC、JJ、CJの相づちの使用実態について分析、比較を行ない、CJに現われたJJとの違いについて母語(CC)との関連性から検討したが、その結果は次のようにまとめられる。

CJは、「ア系」「ウン系」「エ系」及び「くり返し」の使用割合、言語的相づちの各形式の使用頻度、用言の終止形(文末)の相づちの呼応率などにおいて、CC(母語)とJJ(目標言語)の中間に位置している。これは、第二言語学習において見られる、いわゆる母語からの影響と見てよいであろう。

また、「て形」「格助詞」に対する相づちの呼応率が低いのも、母語の構文成分にはそれらの形式がないことに起因するのではないかと思われる。

一方、CJにおいて、言語形式を伴わないうなずきが相づちの総数に占める割合や、相づち的うなずきの総数に占める割合はJJのみならず、CCよりも大きいという結果が得られている。つまり、母語での丁寧さに関する規則が第二言語にそのまま持ち込まれているというだけでなく、その特徴が目標言語においてさらに強められた形となって現われているのである。これは、岡崎(1995)によって提出されている学習者による「円滑化行動」——第二言語の学習者が、受け入れ文化側の話者との間に、積極的に円滑な関係を作ろうとする主体的な行動——と把握される。

以上を整理すると、一般的には第二言語使用は第二言語の規則のみならず、使用者の母語の影響をも受ける。特に文法と違って、相づちのように規則が明示されないものについては、母語の影響を大きく受ける。

さらに、うなずきや視線などのような非言語的表現で母語において「丁寧さ」を表わす肯定的な価値の得られているものについては、第二言語使用においてはさらに重視され、結果として母語で持っている傾向を一層強めて使用されるのではなかろうか。

5. 今後の課題

今回は同一場面の会話における相づちについて比較した。今後は、主に次の3つを課題として、さらに研究を進めていきたいと思う。

1. 今回の調査において見られた傾向が一般化されるかどうか、違った場

- 面における会話を集めて分析することによって調べる。
2. 今回の調査は、中・上級レベルの学習者を対象としたが、今後はレベル別にデータを収集し分析する予定である。中国人学習者の習得段階と相づち使用との相関関係があるかどうかを解明する。
 3. 中国で日本語を学習するのと日本で学習するのとでは、インプットが異なるため、学習者の相づちに関する意識や実際の日本語による相づち使用において差異が現われると予測される。この仮説を検証する。

<注>

その意識に関する指摘を先行研究から二つ取り上げる（下線は筆者）。

- ①個人的な話し合いでは、聞き手は頻繁に相づちを打ち、話し手は相づちを待って次へ進むという形をとる。（水谷1988:7）
- ②聞き手のあいづちやうなずきは、話者の声下げのイントネーションと関連する傾向が見られる。……この実態は、あいづち、うなずき等が、話者の句切りの意図に対応して挿入されることを示している。（杉藤1989:349-350）

参考文献

- 今石幸子(1992)「電話における聞き手の行動—あいづちのタイミングについて
『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』
- 岡崎眸(1995)「日本語学習者における語用論上の移転再考」
『東京外国語大学論集 50』
- 黒崎良昭(1987)「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言
について—」 『国語学』150
- 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺」『語学教育研究
論叢』第3号 大東文化大学語学教育研究所
- 杉戸清樹(1988)「ことばのあいづちと身ぶりのあいづち—談話行動における
非言語的表現—」 『日本語教育』67
- 杉藤美代子(1989)「談話におけるポーズとイントネーション」
『講座 日本語と日本語教育』3 明治書院
- 中田智子(1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10—10
- 長友和彦(1993)「日本語の中間言語研究—概観—」 『日本語教育』81

- 任栄哲・李先敏 (1995) 「あいづち行動における価値観の韓日比較」
『世界の日本語教育』5 国際交流基金 日本語国際センター
- 登里民子 (1994) 「相づち習得の縦断的研究」お茶の水女子大学修士論文
- 堀口純子 (1990) 「上級学習者の対話における聞き手としての言語行動」
『日本語教育』71
- 水谷信子 (1984) 「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」
『金田一春彦博士古稀記念論文集』第2巻 言語学編 三省堂
- _____ (1988) 「相づち論」『日本語学』7-3
- 水野義道 (1988) 「中国語のあいづち」『日本語学』7-13
- メナド 泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 渡辺恵美子 (1993) 「日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において
使用された言語的あいづち—」『日本語教育』82
- 劉建華 (1987) 「電話でのアイツチ頻度の中日比較」『月刊言語』16-12

資料1

被験者リスト

	年齢	民族	方言	専攻 / (所属)	日本語学習時間	在日期间
C1	32	漢族	上海語	日本文学 / (院)	2500 時間以上	4年2ヶ月
C2	28	漢族	北京語	教育学 / (学)	約1800時間	3年4ヶ月
C3	24	満族	北京語	生活社会科学 / (学)	約1800時間	3年6ヶ月
C4	31	モンゴル	北方語	日本語学 / (研)	2500 時間以上	0年5ヶ月
C5	26	漢族	江西語	情報科学 / (学)	約1500時間	5年1ヶ月
C6	27	漢族	北方語	中国語学 / (院)	約1200時間	2年6ヶ月
C7	30	漢族	北京語	教育学 / (研)	約1200時間	3年5ヶ月
C8	31	満族	北京語	情報学 / (院)	約300 時間	2年9ヶ月
C9	27	漢族	福建語	情報学 / (院)	約800 時間	3年6ヶ月
C10	27	漢族	北方語	史学・日本語学 / (院)	2500時間以上	2年0ヶ月
C11	30	漢族	広東語	史学・英語学 / (院)	約1200時間	6年7ヶ月
C12	30	漢族	北方語	史学・日本語学 / (院)	2500 時間以上	2年2ヶ月

専攻 (所属) / 年齢		専攻 (所属) / 年齢		専攻 (所属) / 年齢	
J1	日本文学 (院) / 24	J2	教育学 (院) / 24	J3	物理学 (院) / 24
J4	中国語 (学) / 22	J5	中国語 (院) / 38	J6	中国語 (院) / 26

資料2

(C J) 相づちに用いられる言語形式及び使用回数

形式		話者												計
		C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10	C11	C12	
感 声 的 表 現	1 ア	1			1		1	4	1	4	2		2	16
	2 アー	1	9	9	2	4	7	7	3	2	12	1	4	61
	3 エー	4	1	17				1		1	2	3		29
	4 エー、エー	1		1										2
	5 ウン		3	9	58	7	5	21	3	19	1	4		138
	6 ウンウン		1	1		2	2	1	2	1				8
	7 ハイ	34	17	20	2	2	58	22	32	4	68	10	14	283
	8 ハイ		8	4		2								14
	9 ハイハイ			1							2			3
	10 へー										2			2
	11 ア、ハイ	4	2	1				1		1	1		1	12
	12 アー、ハイ	1						1			2		1	6
	13 エ、ハイ	1									2			1
	14 ハイ、エー			1										1
	15 ウン、ハイ				1		1	1						4
	16 ハイ、ウン		1											1
概 念 的 表 現	17 ソウ												1	1
	18 ソウソウ													1
	19 ソウデスカ	1			1	5			2	3	1		2	16
	20 ソウデスネ			1	1		3		3	2	2		1	14
	21 ア、ソウ		2		1						2		1	6
	22 ア、ソウデスカ	2	3	6	1	5	2	7	1	3	5		4	39
	23 アー、ソウデスカ		1	3				7					2	13
	24 ウン、ソウデスカ				1	2								3
	25 エー、ソウデスネ					1								1
	26 ウン、ソウデスネ				1	1								2
	27 ハイ、ソウデスネ		1										2	3
	28 ハイ、ソウソウ										1			1
	29 ソウデス、ウン		1				1							2
	30 ソウデスネ、ハイ		1				2							3
31 ワカリマシタ	1				2			2	2		4		11	
32 ハイ、ワカリマシタ	1		3			8		2	1		6	3	24	
33 ア、ワカリマシタ			1								1		2	
34 アー、ワカリマシタ		1					1	1			1		4	
35 エー、ワカリマシタ											1		1	
36 ウン、ワカリマシタ											1		1	
37 ナルホド							1							1
くり返し	38 くり返し			2	1	2	8		9	1		1	3	27
	39 ア+くり返し	6	1		2	1		1	1					12
	40 アー+くり返し		2					1						3
	41 くり返し+(です)か	2				1					1			4
42 ア+くり返し+ですか										1				1
43 言い換え(補強)	2	2			1		1		1	1	1			9
44 先取り(完結)						3			2					5
45 その他	2	2	2	3			2		2			1		14
計		64	59	82	76	38	99	80	66	33	128	32	48	805

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻1年)